江戸時代、道教というしゅう教のえいきょうを受けて、人間の肉体には三尸蟲（さんしのむし）というものが巣くっていて、ねている間に天にのぼり、その人のつみを天帝（てんてい・天の神様）に言って、それによって人のじゅみょうが決められるとされていました。そのため、六十日に一度めぐってくる庚申（こうしん）の夜には、誰もがねむらずにてつ夜して、三尸蟲（さんしのむし）がぬけ出さないように見はる庚申待（こうしんまち）が信じられるようになりました。

庚申塔（こうしんとう）の多くは、道標（みちしるべ）のやくわりもあって、分かれ道などに建てられました。